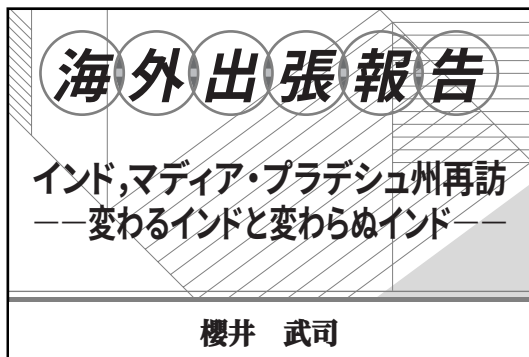




2005年12月14日、私は8年ぶりにインド、マディヤ・プラデシュ州のボパール空港に降り立った。インドの中央部、デカン高原の北端に位置するマディヤ・プラデシュ州は、私にとってたいへん思い出深い土地である。1995年10月に農業総合研究所に選考採用された私が、初めて本格的なフィールドワークに取り組んだ場所だからである。

私が州都ボパールにあるインド森林管理研究所（Indian Institute of Forest Management, IIFM）を初めて訪れたのは、1996年10月のことである。この訪問は、非常に不安に充ちたものであった。なぜなら、私はこの研究所に知人が一人もいなかったというだけでなく、誰かにこの研究所を紹介された訳でもなかったからである。ウェブで見つけたファックス番号を頼りに訪問受け入れ願いのファックスを送ったところ、歓迎するとの返事が届いた。ただ、それだけだった。10年前のウェブ事情を思い起こせば、それが本当に蜘蛛の糸を手繰るように頼りないものだったことを理解していただけるであろう。

ともかく、その訪問の結果、私はIIFMをカウンターパートにしてマディヤ・プラデシュ州で森林資源管理に関する共同研究を実施することを決定し、翌年に地球環境研究の予算を使って現地調査を開始した。詳細はここでは触れないが、この共同研究では様々な問題が生じ、私は共同研究の実施方法についても、たいへん多くの経験を積むことができた。最後の訪問となった1998年3月、空港に向かう車の中からボパールの町並みを見て、もうここに来ることはないかも知れないという感慨にひたったことをよく覚えている。

私自身は、その後国際農林水産業研究セン

ターに出向し、西アフリカに長期滞在していたこともあり、インド研究からは少し距離をおいてしまった。しかし、その間、インドの経済発展はめざましく、わが国においても様々な形でインドとの協力関係を築こうという気運が勃興してきた。そこで、2004年4月に政策研に復帰した際に考えたのは、インドとの研究協力関係を再開しようということであった。インドの経済発展は、インフラが未整備で貧困州だった内陸のマディヤ・プラデシュ州にも及んでいるはずである。それは住民参加に基づく同州の森林管理プログラムにも影響を与えているに違いない。その解明を目的として、1997年に調査した60カ村の360名の住民を再調査するという研究を企画したのである。幸いにも科研費が当たり、2005年度から再調査を実施できることになった。今回の出張は、その準備のためである。

8年の歳月は、街の様相をかなり変えていた。新しい住宅街や商業施設が各所に建設されている。自家用車の普及も進んでおり、IIFMでもスタッフのために駐車場を建設中だった。めざましい変貌ぶりではあるが、事前の予想を超えるほどのものではない。

今回の調査では、鉄道で片道約5時間の距離を往復した。インドの鉄道はITによる近代化が進んでおり、コンピュータにより指定席の発券が管理されている。しかし、実際の運行では、5時間も走れば、どこかで必ず遅れが発生するものである。ところが驚いたことに、行き帰りとも、予定どおりに到着した。

計画どおりに日程を終えて帰路につく日があった。ボパール空港でデリー行きの国内線のチェックインをすますと、出発は30分遅れだという。そのまま待っていると、突然、フライトがキャンセルされたというアナウンスがあった。見かけでは近代化したシステムに脆弱性が顕在化するのは、このような危機の際である。案の定、キャンセルされたフライトの予約客を別会社の便に振り分ける作業は、完全に人手に頼っており混乱を極めた。どこで何が起きているのかわからないが、待っているのでは埒があかない。自分から積極的に交渉相手となる職員を見つけ、チケットに裏書きをもらわないといけけないのだ。変わらぬインドをここに発見した。